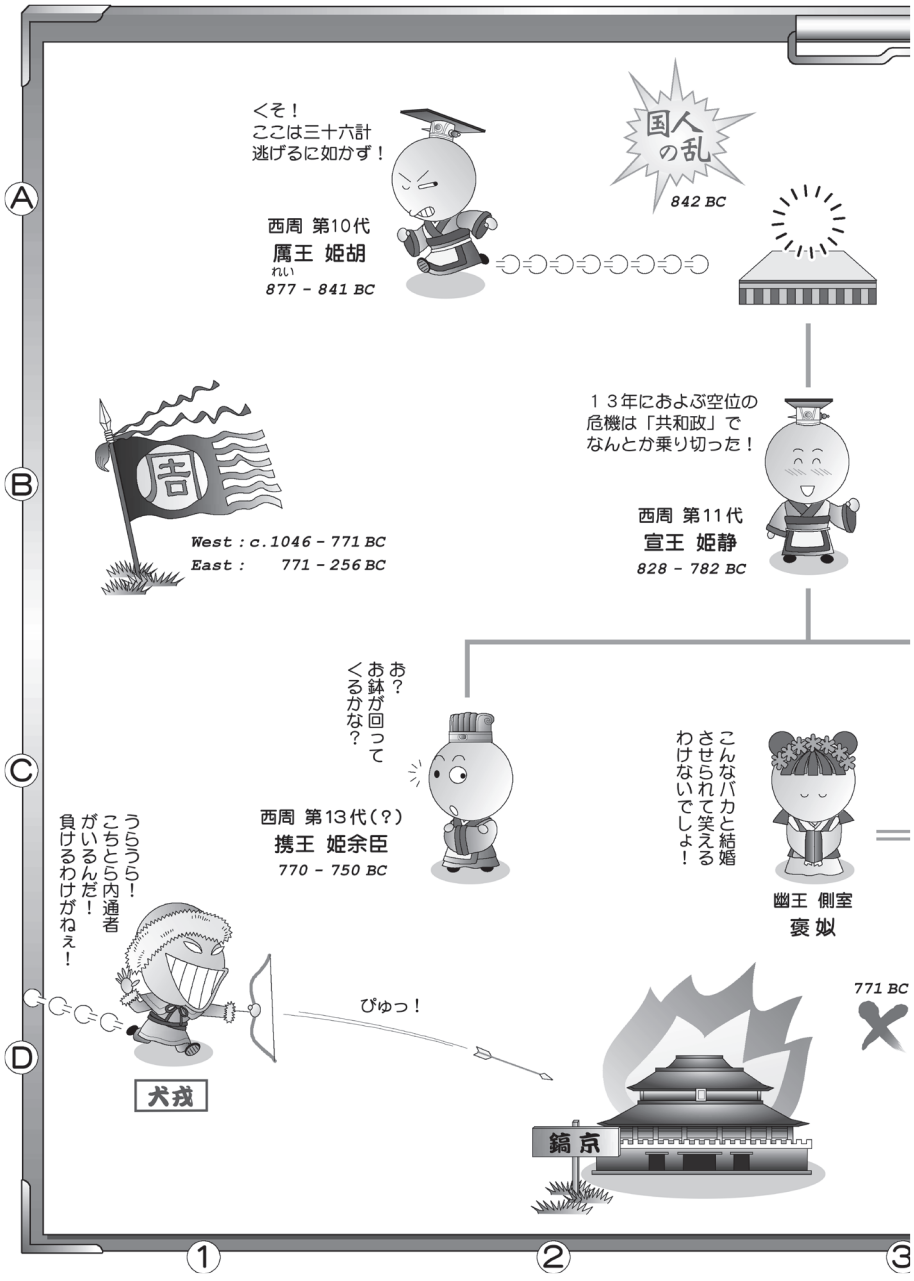
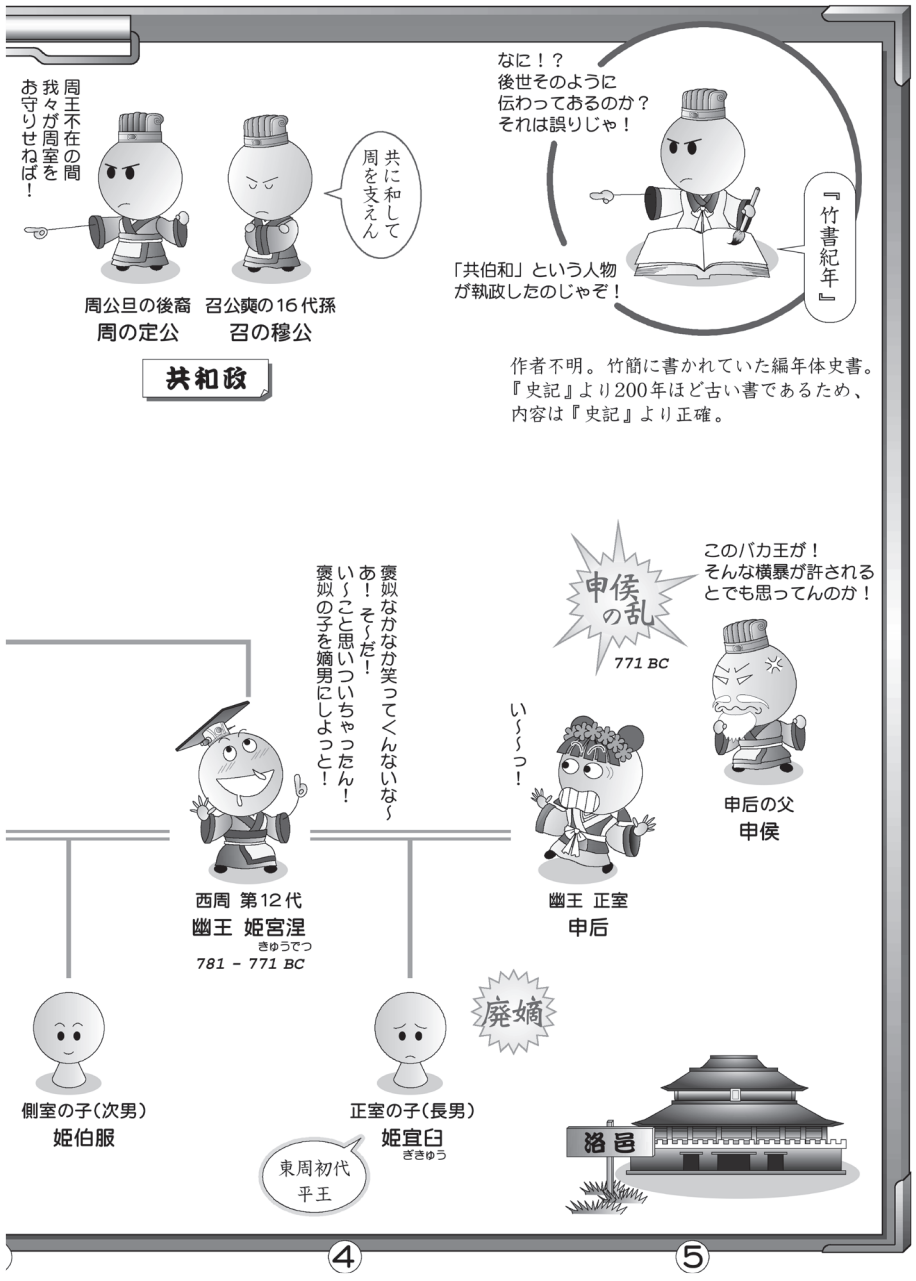
〈 周の東遷 〉

前９世紀中葉～前８世紀中葉





現在のところ、考古学的な裏付のある中国最古の王朝は、今から3700年ほど前に生まれた「殷(＊01)王朝」ですが、これはまだ「邑(＊02)の連合体（邑制国家）」にすぎず、まだ領域国家でもなければ「漢民族」という概念すら存在しない(＊03)時代でした。

それから700年ほど時代が下って「周王朝」の時代になると、それぞれの邑を王室（姫姓）の血縁またはその功臣で固め、より結びつきを強くした「封建体制」となったことで「領域国家」への指向が始まったものの、依然として

①「邑制国家」を基盤としていた点

②「漢民族」という概念が存在しなかった点

…など、周は本質的に殷の時代から変わっていません。

しかし、その周も建国より200年ほどで傾くと、そこから歴史が動きはじめます。

本書はまさにこの「旧時代から新時代への“産みの苦しみ”の時代」、すなわち「春秋・戦国時代」を扱ったものとなります。

そして、周の斜陽を象徴する事件こそが、周王第10代の厲王のころに勃発した「国人の乱（A-2/3）（前842年）」でした。

これは、暴君を殺害せんと叛徒が王宮にまで乱入したもので、このとき厲王は命からがら都を脱出（A-1/2）できたものの、以降、周は丸13年にもわたって王不在（A-3）となって存亡の機に陥ります。

しかしこのときは、2人の諸侯――周の定公と召の穆公（A-3/4）が協力し（共に和し）て政務に当たって(＊04)落日の周を必死に支えたと伝わります。

この故事から「王不在の人臣による合議政」のことを「共和政（A/B-3/4）」と呼ぶようになりました。

さて、その「共和政」も終わり、つぎの宣王（B-3）の御世になると一時国勢を盛り返したものの、その次の王の御世に周は亡びることになります。

それこそ、中国史上でも指折りの暗君として有名な「幽王（C-3/4）」です。

幽王にはれっきとした正室申后（C-5）とその間に生まれた嫡男宜臼（D-4）がいたにもかかわらず、あとから後宮に入ってきた褒姒（C-3）という美女に溺れ、彼女との間にできた子・伯服（D-3）を立太子してしまいます。

一度定まった世継を廃嫡（D-4/5）するなど、いつの世でもどこの国でも国を亡ぼすほどのインパクトあるお家騒動に発展する大事です。

宜臼の廃嫡を知った当時の太史（秘書官）伯陽甫などは、「禍成れり。周亡びん。」と嘆いていますが、彼の懸念通り、国は「長男（宜臼）派」と「次男（伯服）派」に分かれて対立が始まってしまいます。

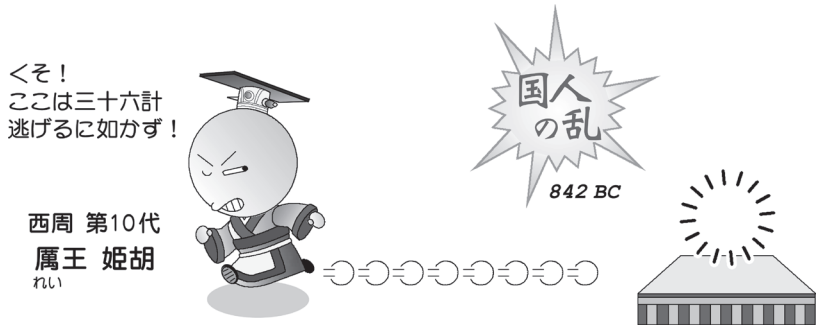
しかし、そんな状況も当の幽王はどこ吹く風。

『史記』には彼の脳天気ぶりを表す逸話が記されています。

――政務もそこそこ、幽王は“笑わない王妃”褒姒をなんとか笑わせようといろいろと試してみるも、彼女は決して笑わない。

道化師を呼んでも笑わない。

正室にしてやっても、彼女の子（伯服）を立太子してやっても笑わない。



（＊01）正式な王朝名は「商」ですが、これを討ち倒した周が商を「殷」と呼んだため、こちらの王朝名の方が広く知られています。

（＊02）古代中国に現れた都市国家のこと。都市国家といっても各地の環境・歴史背景に合わせてそれぞれ特性が違うため、たとえば古代エジプトなら「ノモス」、古代ギリシアなら「ポリス」といった具合に、それぞれ固有名詞が与えられています。

（＊03）当時、中原に住んでいた民族は「華夏族」と呼ばれていましたが、殷周・春秋戦国時代にかけて、華夏族と周辺諸民族（夷狄蛮戎）が混血を繰り返して均質化し、新たな混血民族が生まれます。これが今から2000年ほど前より「漢民族」と呼ばれるようになります。

（＊04）『史記』に拠る。作者不明の『竹書紀年（A-5）』では、政務を執ったのは「共伯和」なる人物とあります。

そんなあるとき、兵乱の合図である狼煙が上がったため、諸侯らは大挙して駆けつけましたが、来てみれば、平穏な都に諸侯たちは目を白黒。

この様を見た褒姒が大笑いしたのを悦んだ幽王は、何事もないのに何度も狼煙を上げさせたため、やがて本当に外敵（犬戎）（D-1）が攻めてきたとき、誰も援軍に駆けつけてくれなかった。

こうして都（鎬京）（D-2/3）はあっけなく陥落し、幽王と伯服は殺され、褒姒は犬戎に連れ去られてそのまま消息を絶ち、周（西周）は滅亡した。

しかしながら、この話はイソップ寓話「狼少年」の話ともそっくり（＊05）で、これに“いつも男が国を興し、女がそれを亡ぼす”という中国人好みの定型文（＊06）を組み合わせた、如何にもお伽噺っぽく、これを史実としてそのまま鵜呑みにすることはできません。

おそらくは、援軍に駆けつけなかった諸侯を正当化するために、あとから取って付けられた創作でしょう。

史実は、「長男派」と「次男派」の対立が深まる中で、長男派の領袖たる申侯（＊07）（C-5）が西の犬戎と手を組んで叛乱（申侯の乱）（B/C-5）を起こしたとき、多くの諸侯が主君（幽王）の援軍要請に応じませんでした。

その理由は「狼煙事件」のせいなどではなく、日頃から幽王に対する不満が鬱積していたからでしたが、たとえ不満があったにせよ、王を見殺しにしたのは不忠であったため、「笑わない王妃」という寓話を挟んで諸侯らに正当性を与えた、と考えるのが自然です。

ところで、鎬京陥落後の歴史も史書によってだいぶ話が異なります。

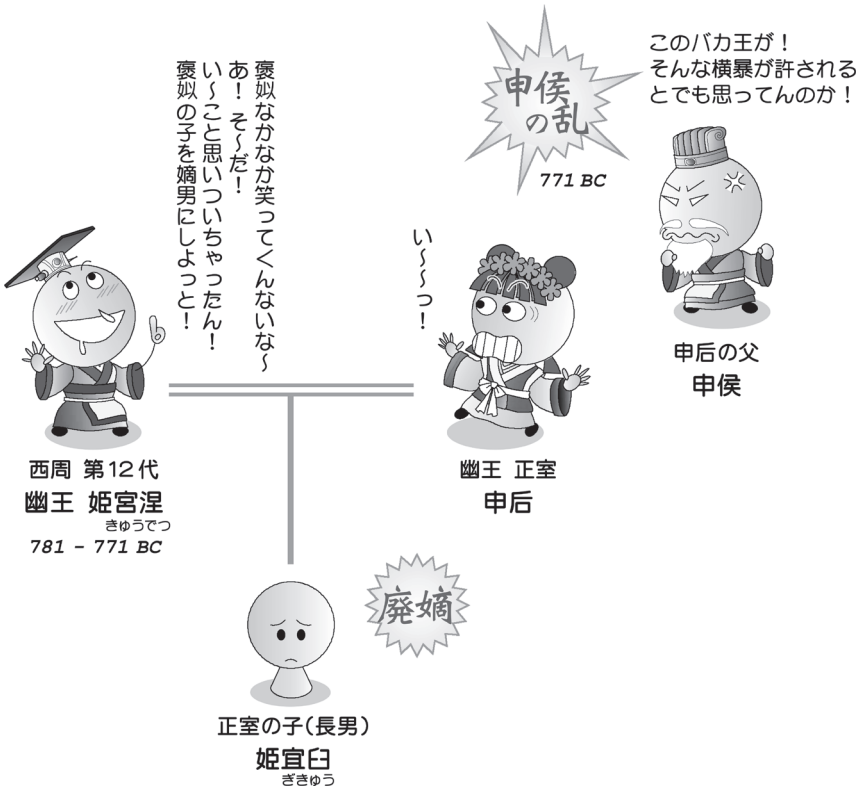
多くの書で採用されている『史記』に拠れば、

――幽王および伯服（次男）の死により宜臼（長男）が即位して「平王」となったものの、こたびの戦乱で都（鎬京）がすっかり興廃してしまったため、やむなく洛邑（D-5）に遷都することになった。

以降を「東周」と呼ぶ。

…とあり、ここに幽王の弟・携王（C-2）は登場しません。

ところが『竹書紀年（＊08）（A-5）』によれば、申侯が孫（宜臼）を即位させてこれを平王としたところまでは『史記』と同じですが、犬戎に伯服を殺されて旗標を失った「次男派」の虢石父（＊09）は、今度はその弟を祀りあげて「携



（＊05）通説では、『イソップ寓話』が中国に伝えられたのは明代とされていますが、あまりによく似ていますから、ひょっとしたらこのころすでに司馬遷の耳に入っていたのかも？

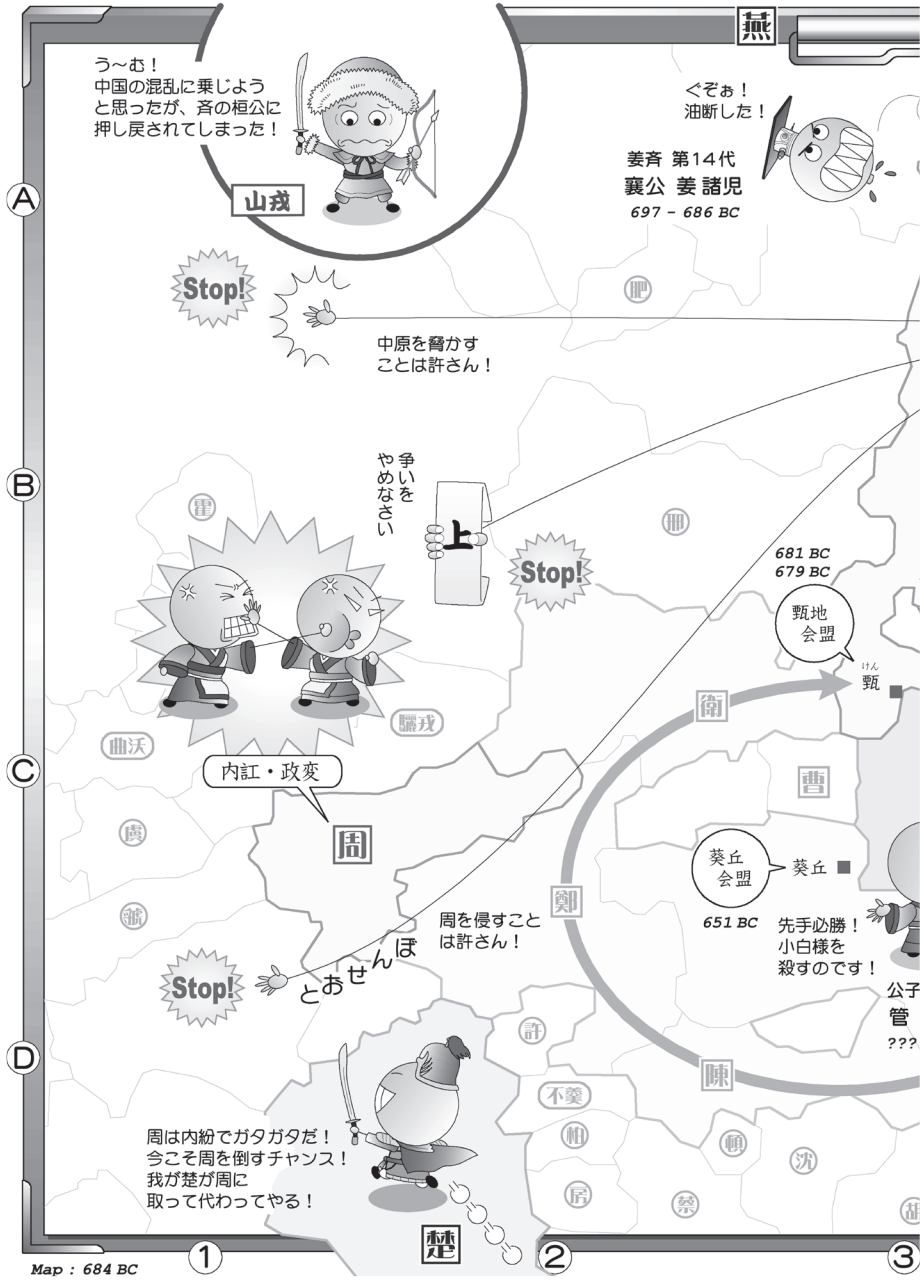
（＊06）夏の桀王は妹嬉に溺れて国を亡ぼし、殷の紂王は妲己に溺れて国を亡ぼし、そして、周の幽王は褒姒に溺れて国を亡ぼした――というわけです。

（＊07）申后の父、宜臼の祖父。鎬京から渭水を100kmほど上流（西方）にのぼった申の諸侯。

（＊08）おそらく戦国時代に書かれた編年体の史書。作者不明。『史記』には触れられていない出来事や、『史記』の誤りを発見することに役立っている貴重な書。

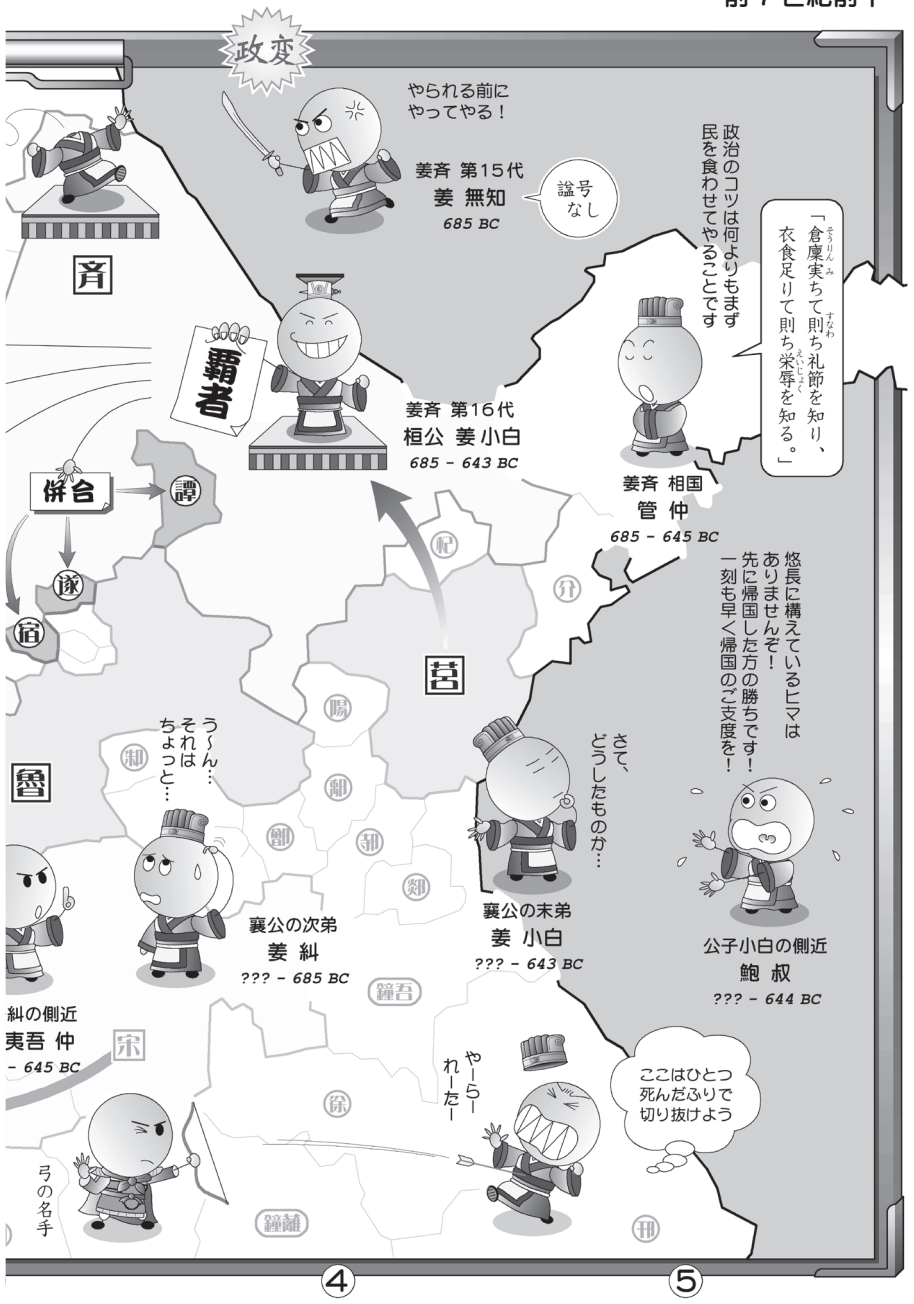
（＊09）西虢の君主。幽王の佞臣。褒姒を笑わせるため、狼煙を上げさせたのも彼。

〈春秋五覇（斉の桓公）〉



Map : 684 BC

前７世紀前半



周王朝の建国物語は、初代武王の父（文王）がある日狩りに出かけたとき、たまたま渭水の畔で釣をしていた“とある人物”と出逢ったことから始まった――と伝わります。

その人物こそ一般的に「太公望」と呼ばれる呂尚［子牙］(＊01)その人であり、文王はこの老人を一目見て、「あなたこそ、我が太公（祖父）が待ち望んだお方だ！」とそのまま軍師として迎え入れた、と『史記』にあります。

周の軍師となった太公望は、殷周の対立が拮抗する中、第三勢力として隠然たる力を持っていた「召」の説得工作に入り、召公奭（姞奭）を味方陣営に組み込むことに成功します。

こうして、武王を中心として周公旦（武王の弟）・太公望（軍師）・召公奭（盟友）の３人がこれを支える形で、ついに剋殷（殷周革命）を成し遂げました。

この功により、召公奭は国姓（姫）を賜り、“武王の弟分”として迎えられる厚遇まで受けました(＊02)が、その武王が即位よりわずか２年で若くして急逝してしまったため、幼君（成王）が後を継ぐこととなり、周室は建国早々の危機に見舞われます。

建国後、まだ地盤も固まっていない状態で幼君が立てば、かならずといってよいほど“波”が立ち、それはたいてい王朝そのものを倒壊させるほどの“津波”となって襲いかかるものです。

しかしこのときは、周公旦が摂政としてこれをよく補佐して国難(＊03)を切り抜けたうえで成王が成人した暁には“大政奉還”するという離れ業をやってのけた(＊04)おかげで事なきを得、おかげで周王朝は、以降、成王・康王の２代にわたって「成康の治」と呼ばれる安定期を迎えることができました。

周王朝はこうした建国の元勲らの功に報いるため、周公旦には「魯（C-3）」を、太公望には「斉（A-3/4）」を、召公奭には「燕（A-2/3）」を与え、中央ではそれぞれ三公(＊05)の地位に付けます。

本幕は、こうして生まれた「斉」「魯」が中心となる時代です。

そもそも周が東遷して以降を「春秋時代」と呼ぶようになったのも、ちょうどこの時代（前771～453/403年までの約350年間）が孔子による編纂と伝えられる「魯」の年代記『春秋』で扱われている時代（722～481年B.C.）とほぼ一致するためです。

春秋初期に濫立した諸侯の数を数え上げてみると、文献上にその名が見えるものだけでも200余国にもなりますが、主だった国となると約50ほどとな

(＊01)氏は「呂」ですが、本姓は「姜」なので「姜尚」と呼ばれることもあります。
ちなみに、中国における「姓」「氏」「名字（苗字）」の違いは、日本のそれとは違い、大きな血縁集団（部族）に与えられた固有名が「姓」、その支族（氏族）に与えられた固有名が「氏」、さらにその支族（家族）に与えられた固有名が「名字（苗字）」となります。
なお、本書本文中で［　］で括られている部分は字（あざな）です。

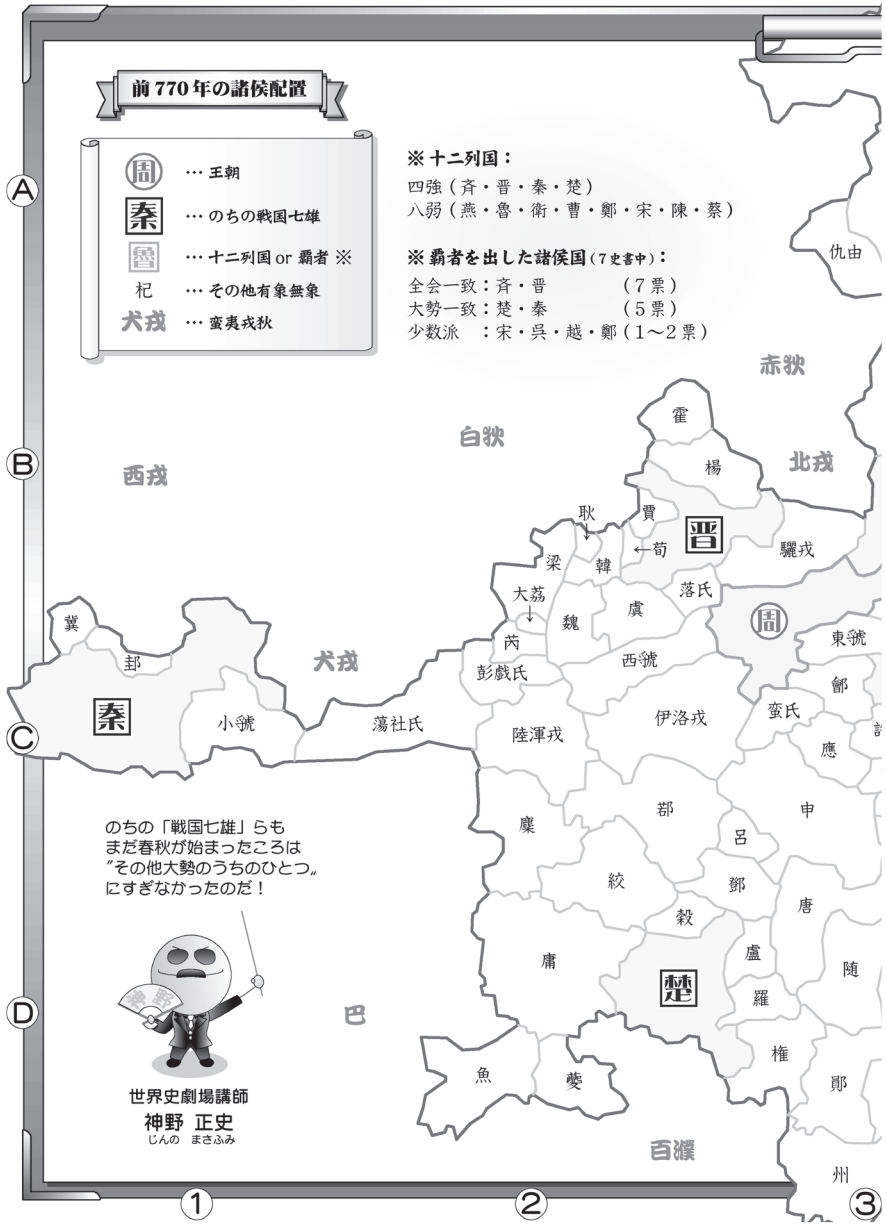
(＊02)「召公奭」に関してはよくわかっておらず諸説紛々、多説のうちの一説とお考えください。

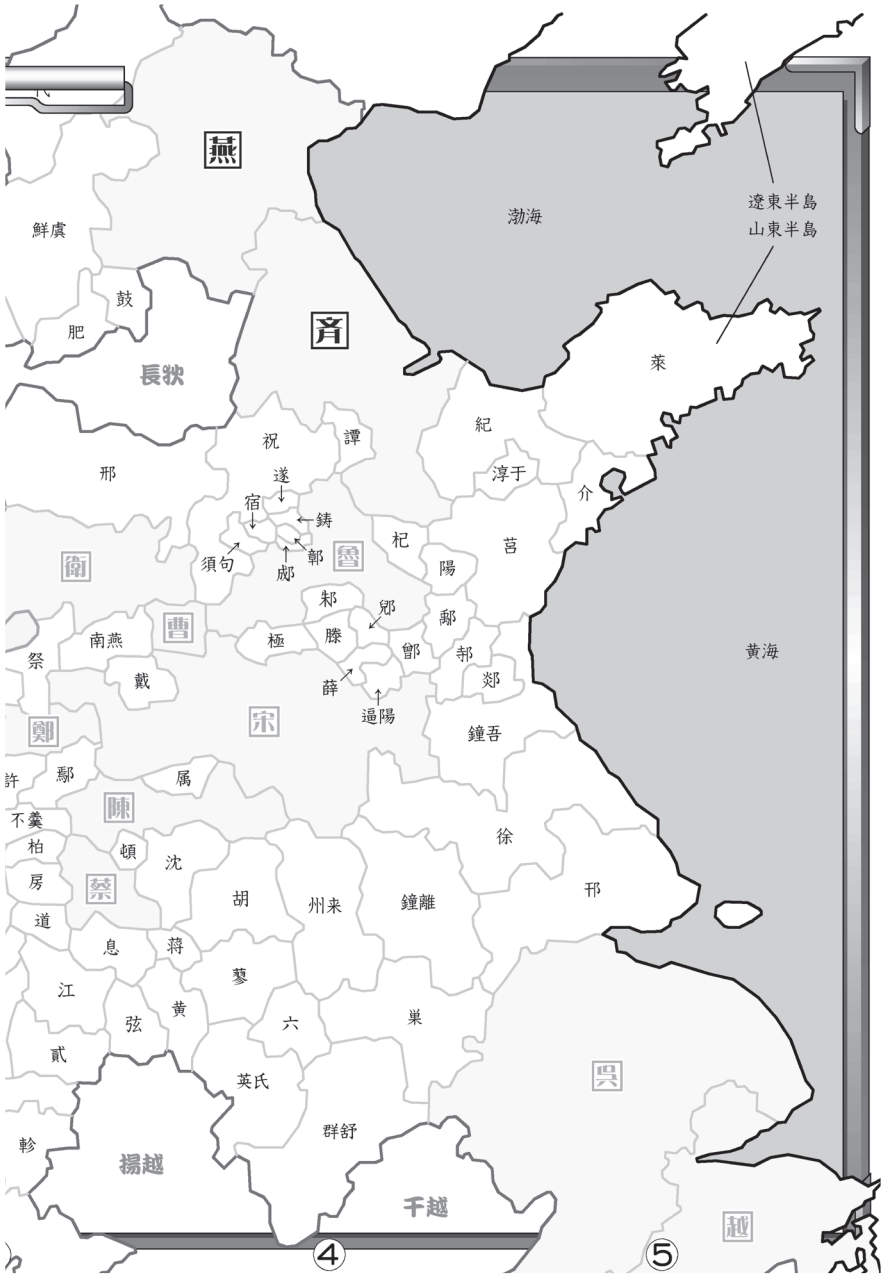
(＊03)武庚（殷の遺児）・管叔鮮（周公旦の兄）・蔡叔度（周公旦の弟）による「三監の乱」。

(＊04)たいていは我が子かわいさで自分の子に継がせたくなってしまうものです。

(＊05)天子直属の人臣最高位。周公旦が太傅（天子の傅役）、太公望が太師（天子の師）、召公奭が太保（天子の相談役）に就きました。

〈 春秋初期の諸侯配置 〉


前770年の諸侯配置
周 … 王朝
秦 … のちの戦国七雄
晉 … 十二列国 or 覇者 ※
杞 … その他有象無象
犬戎 … 蛮夷戎狄
※十二列国：
四強（斉・晋・秦・楚）
八弱（燕・魯・衛・曹・鄭・宋・陳・蔡）
※覇者を出した諸侯国（7史書中）：
全会一致：斉・晋　（7票）
大勢一致：楚・秦　（5票）
少数派　：宋・呉・越・鄭（1～2票）
のちの「戦国七雄」らも
まだ春秋が始まったころは
〝その他大勢のうちのひとつ〟
にすぎなかったのだ！
世界史劇場講師
神野 正史
じんの まさふみ
A
B
C
D
1
2
3
赤狄
白狄
西戎
北戎
犬戎
巴
百濮
仇由
霍
楊
耿
賈
梁
韓
荀
大荔
魏
虞
芮
彭戲氏
落氏
驪戎
東虢
西虢
鄫
蛮氏
應
冀
邽
小虢
蕩社氏
陸渾戎
伊洛戎
麇
郡
呂
申
絞
鄧
穀
唐
庸
盧
羅
隨
鄖
魚
夔
権


燕
渤海
遼東半島
山東半島
鮮虞
肥
鼓
長狄
斉
萊
祝
譚
紀
邢
遂
宿
鋳
淳于
介
須句
邾
邿
杞
莒
陽
衛
邾
南燕
極
滕
鄫
郚
祭
戴
薛
逼陽
郯
鍾吾
宋
鄭
許
鄢
屬
不羹
陳
徐
柏
頓
沈
房
蔡
胡
州来
鍾離
邗
道
息
蔣
蓼
江
黄
六
巣
弦
貳
英氏
呉
軫
群舒
揚越
千越
越
黄海
1
2
3
4
5

り、中でも特に有力な国は「十二列国」と呼ばれる斉・晋・秦・楚（D-1/2）の四強と、その他の燕（A-2/3）・魯・衛（C-2/3）・曹（C-2/3）・鄭（C/D-2）・宋（C/D-3/4）・陳（D-2/3）・蔡（D-2/3）の小国を合わせたたった12ほどにすぎません。

いづれにせよ、周王朝がこれらの諸侯を抑えることができなくなったとなれば、これに代わって「諸侯を統制し、中原（＊06）に秩序を恢復し、外夷の脅威からこれを護ることができる者」が必要となってきます。

こうした“歴史的役割”を担って登場してきたのが「覇者（A/B-4）」です。

そして、その「覇者」として最初に名乗りを上げたのが、太公望から始まる「斉」でした。

斉は、春秋時代初期から頭角を現しはじめ、次第に他を圧倒する国力を持ちはじめたものの、時の第14代君主襄公（A-3）が暴君であったため、その害は親族にまで及び、公の弟・姜糾（次兄）（C/D-3/4）は魯へ、姜小白（末弟）（C-4/5）は莒（B/C-4）へ亡命しなければならないほどでした。

こうした混迷の中、案の定、まもなく襄公は彼に冷遇された公孫無知（襄公の従弟）（A-4）に誅殺され、その公孫無知もまた鼠輩に討たれ、相次ぐ政変騒ぎによって斉は主のいない状態となってしまいます。

そこで斉では、亡命中の糾か小白、どちらかを新公に迎え入れようと待望論が湧き起こります。

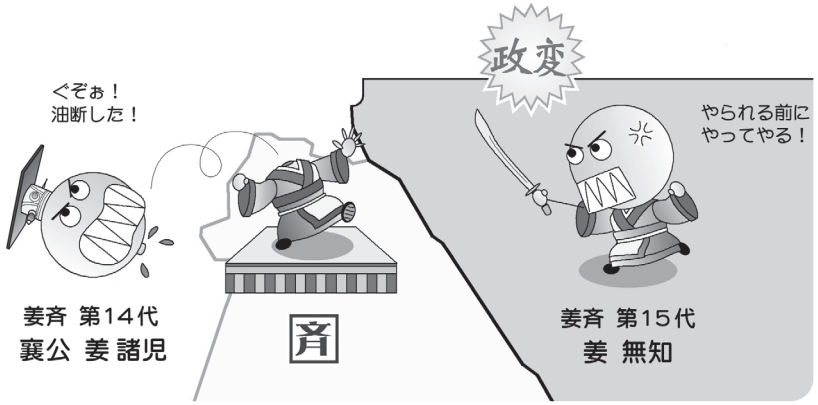
そうなれば、先に斉に帰国した方が玉座に近いことは明白で、事は一刻を争います。

こうした変局にあって、本領を発揮するのが軍師（＊07）であり、その采配の適否で主君の死命を決することもあります。

このときの糾の軍師だった者こそ、あの有名な管夷吾［仲］（＊08）（C/D-3）

（＊06）狭義では「黄河中流域一帯」のこと。ここで「中国の中心部」くらいの意。

（＊07）狭義では「将軍に戦略を助言する相談役」ですが、ふつうはもっと広い意味で「政治・経済・軍事全般にわたり、主君に政略・戦略を助言する相談役」といった役割。
「軍師」という役職名が生まれたのは後漢以降ですが、これに相当する立場の者は古くからおり、本幕で登場した「太公望」もそうですし、管仲もその代表格です。



であり、そして小白の軍師こそが、その親友であった鮑叔（C-5）であり、2人は無二の親友（＊09）でもありました。

「これは時間との戦いになるぞ！　今すぐ帰国せねば！」

焦る糾に対し、管仲はこれを遮るように言います。

――糾様、お待ちください。

たとえ我々が先に帰国したとしても、あとから小白様が帰国してきます。

そうなれば、どうせ一戦交えなければなりません。

先手必勝、そうなる前に手を打っておくに如くはありませぬ。

「というと？」

――帰国の途にある小白様を待ち伏せして、お命を頂戴いたします。

「いや、しかし、それは…」

――躊躇ってはなりません。

一瞬でも躊躇った方が、襄公や無知殿の二の舞となるのですぞ。

こうして管仲はただちに帰路を急ぐ小白を待ち伏せ。

（＊08）彼は名（夷吾）より字（仲）の方が圧倒的に有名なので、通常「管仲」と呼ばれていますので、本書でも以後「管仲」と呼ぶことにします。

（＊09）この2人は篤い友情で結ばれ、その友情は後世「管鮑の交わり」という成句を生んで永く語り継がれるほどでした。